

海外リポート

## 第13回国際解剖学会議に出席して

鈴木 裕子

口腔解剖 II

去る8月6日-11日、ブラジル・リオデジャネイロ市で開催された第13回国際解剖学会議に出席、研究発表する貴重な機会を本学から与えられましたので、その報告をいたします。

ロス、サンパウロ経由で、成田をたってから26時間後、ようやく到着したリオデジャネイロは日本と反対の冬の季節でしたが、気温は25°C前後で湿度も低く、学会期間中快適に過ごすことができました。宿泊したホテルはコパカバナ海岸というリゾート地にあり、亜熱帯特有の美しい緑の海、白い砂浜、休暇を楽しむ人々が一望されました。しかし、山側にはファベラと呼ぶ貧民窟がたち並んでおり、治安が悪いと聞いていたので最初は緊張しました。またこの国はデノミを繰り返す超インフレ状態にありますが、日常使用されているお札は新、旧混ざっており、対ドルレートも日々変わるので、食事、買い物には苦労しました。学会場はホテルからバスで40分位かかり、リオセントロ・コンベンションセンターというF1自動車レースにも使用されたという広い施設でした。期間中毎日、午前と午後、2回、約350題のポスター発表が行われました。このうち日本人の発表は65題ですが、プログラムは関連分野を集めるわけではなくミクロもマacroも一緒に編成のせいかディスカッションは盛り上がりに欠けているように感じました。

今回、発達過程の嗅上皮のケラチンフィラメントについて免疫組織化学と電顕の結果を報告しました。嗅細胞は感覚神経細胞ですが turn

overするため基底細胞が分裂、増殖して嗅細胞を作るわけです。基底細胞は10nm径フィラメント構成蛋白としてケラチンを持つのですが、嗅細胞になった時、他の種類のフィラメント蛋白を持つようになるのか、またはケラチンが消失したまま10nm径フィラメントは作らないのか、二、三質問を受けました。感覚器関係では皮膚、粘膜のメルケル細胞、層板小体の形態についてサンパウロ大のWatanabe教授の一門が10題近く発表していたのが目立ちました。全般的にポスター発表ではブラジル国旗をModifyしたものなど、派手なものが多く、レイアウト、色の使い方は参考になりました。

ポスターと並行してシンポジウム、コース、セミナーが開催されました。コースは新潟大の藤田教授の主催する走査電顕技術の進歩について、とWeibel教授のコンピュータを用いた組織の計測学など5項目あり、Dr.Mottaの走査電顕写真に彩色した発表では学生の教育用にいうことでしたが、その芸術的色調に関心が集まっていました。シンポジウムはExtracellular Matrixなど13項目、セミナーでは南米産の脊椎動物の生殖について報告がなされていました。

学会は終始、南米的おおらかさで運営、進行がなされており、日本人にとっては少々なじみにくい面がありましたが、学会終了後アルゼンチンとペルーもまわることができ、南米諸国のcultureに触れたことは大きな経験でした。

今回の海外出張に際して本学の関係者の方々には大変御世話になりましたことを厚くお礼申し上げます。